

## ボランティアでの出会い

宮内 寿彦(地域連携センター副センター長)

学生時代を振り返ると、いくつかのボランティア体験したことを思い出します。体験と言っても、決して積極的な行動ではなく、実習に行くための必須の事前体験でした。

1990年夏、九州のある重症心身障害児(者)施設を訪問した時のことです。それまで、ほとんど障がいをもった人と接したことがなかった自分は、挨拶等、基本的なコミュニケーションを取るどころか、何をしたいのかかわからず、立ちつくして何もできませんでした。その姿を見た指導員から、「きみは何しにきたんか、そのへんでも掃除しとき」と言われました。掃除の途中「何をしているんだろうと?...」空しさと怒りで、勝手に帰ってしまいました。翌日、そのことが担当教員の耳に入り、激しく説教されます。当時の自分は福祉なんて偽善…なぜ、自分のことも大切に出来ない者が、他者へ援助できるのか、なぜ、一生懸命に残されたからだの機能を駆使して、懸命に生活されている人たちへ、威張ったり、ため口で、上から目線で接するんだ....その想いが強くなり、退学することばかり考えてました。そうこうする内に、再びその施設でのボランティア体験活動が決定、やる気のないボランティアが始まりました。



活動数日後、はじめての食事介助。Mさんを担当する。四肢麻痺で、食事の時は誤嚥防止のために、電動車椅子に座位状態をベルトで固定して摂食されてました。食事のペース、声かけ、水分補給など、その時は、ただ一生懸命、接したことを記憶してます(スプーンで口元に運ぶと、自然と自分の口も開く等に気がつく)。食事が終わったあと、自分の目をじっと見つめ、かすかに聞き取れる声で「す…な…お…に…」そう聞こえました。翌日から理由はわかりませんが、自分からMさんの食事介助等を申し出ていました。最終日の反省会。変身した自分の姿を見た指導員は「またうち(施設)に来て良いよ」、様子を見に来た担当教員は、「指導の効果がでたようです」と笑みを浮かべて喜んでました。

夏が終わり、後期開始。10月初旬のある日、郵便物が届きました。宛名はMさんでした。中には、手作りのコーヒーカップと手紙が同封されてました。手紙にはMさんのそれまでの半生が綴られてました。一級建築士の妻として事務所を切り盛りしていたが、不慮の事故で障がいを抱える。そのことが原因で離婚。ある日、別離した息子が進路で迷って、施設を訪ねて来た時に「こんなからだでなにもできない母親だけど、自分の存在とあなたの幸せを大切にしている」と息子に伝えたそんな内容でした。

まだ福祉に対してわだかまりがあった自分でしたが、もし、福祉分野で就職をしたら会いに行こうと心に決めました。それから数年後の夏、特別養護老人ホームの職員となった自分は、再びその施設でMさんと再会をすることができました。

一つの体験、一人の人との出会いは、その後の人生や生き方を左右することもあります。現在、BICSでは60人以上の学生が、様々な動機で様々な活動を行っています。時には苦い体験をすることがあっても、やがて学生個々の隠された「人間力」の可能性を引き出せる。そんな活動であってほしいと願ってやみません。

## 「あそびの広場まるびいの森の1年間」

千葉 史織 ・ 坂本 千絵(あそびの広場まるびいの森1年)

まるびいの森は、クラフトやゲーム、あやめ際の参加などを通して23人の子どもたちと一緒に触れ合ってきました。

回数を重ねるごとに、最初は恥ずかしがっていた子ども、自分から積極的に話せなかった子どもが今では楽しそうにまるびいの時間を過ごし、その活動の中で個々の個性を發揮しています。

今ではボランティアの人数が増え、子ども1人1人と学生がバディを組んで行動することにより、安全面を充実させ、子どもの表情や様子を間近で感じることができています。

また、活動終了後の親への引渡しの際には、その子の良かった点や気づいた点などを直接話すことで、保護者とのコミュニケーションをとっています。

しかし、子どもを学生から親への引渡しにおいて不適切な対応をしてしまい、親に心配をさせたというような失敗もありました。このような問題や反省点については、定例会などを通して「何がいけなかったのか」「再発しないようにするためにはどのようにするか」を話し合い、改善していきたいと思います。

5月の活動から、まるびいの活動全体の雰囲気も内容も充実してきているので、反省点を生かし、子どもたち、保護者の意見を取り入れてこれからの活動をさらに盛り上げていきたいと思います。

## 「バウムクーヘンの活動について」

穂積 佳奈子(バウムクーヘン1年)

バウムクーヘンでは、昨年10月に「あやめ祭」、12月に「クリスマス会」を開催しました。

10月のあやめ祭では「あそびの伝承」を開催しました。老人会に協力を得て約10名の方に昔の遊びを子どもたちに教えていただきながら、子どもたちと地域高齢者たちなど世代間交流をしました。当日は、年齢層がさまざまで、たくさんの方々が笑顔で楽しみ喜んでもらうことができました。子どもたちの中には、昔の遊びが出来る子がいたり、この企画で昔の遊びを覚えて帰って行ってくれた子もいました。

そして、12月の「クリスマス会」では地域の老人会の方々が、約60名参加してくださいました。当日は、学生と世代間交流をしながら、地域のフラダンス同好会の方々によるフラダンス披露や、大学のハンドベル同好会「ティンカーベル」の方々によるハンドベル演奏会などといったイベントを行いました。バウムクーヘンの学生実行委員による、手話歌講座やフラダンス披露、手話歌披露といったイベントも行いました。今回は、バウムクーヘン学生実行委員がイベントで披露したので、いつもと違う経験でき、よりたくさんのごことを得ることができました。

3月には、「お花見会」という大きな企画を行います。地域の方と学生との交流ばかりではなく、地域の人同士での交流も深めていこうという企画です。これからも、いろんな方と交流しながら、交流の場を提供していこうと考えています。

## 「ピース☆の活動について」

諏佐 あゆみ(ピース☆リーダー)

ピース☆は自閉症児との活動の他に、地域の障害者のニーズに応じていくことを目標として地域に出てボランティアや施設見学を行うことになりました。そこで、各自学びたい障害の領域に分けることで将来にも繋げていけるのではないかと考え、精神障害と知的障害の二つのワーキンググループに分け活動しています。

知的障害のグループでは、地域委員の有山さんにもご協力をしていただき、ふじみ野周辺の障害関係のグループを紹介していただいたり、センター21にもボランティアに行かせていただく予定です。

また、精神障害のグループも精神障害者の方が働く作業所を見学させてもらう予定です。

これから実際に施設見学やボランティアを通じて地域の障害者や障害施設と連携をしていきます。

## 「初めてのボランティア活動」

村野 修平(まなびの教室1年)

2007年も新一年生は夏休みの日本語指導講座に参加した後それぞれの小学校に支援に行き、新二年生は引き続き支援に行きました。

僕がまなびの教室(以下:まなび)の存在を知ったのは2007年の5月でした。まなびは「日本語を母語としない児童に対する支援」を目的に日々活動しているという案内を見て、興味を持ち始めたのがこのまなびに入るキッカケでした。僕は子どもと接するのが大好きで「児童に」日本語を「教える」ことができるこの団体にはぜひ入りたいと思いました。そして、実はもう一つ理由があって、僕は外国語にも興味があるので、ココに入れば外国人との繋がりにも発展させることができそうだなという考えもありました。

実際に入ってみて先輩たちはとても優しくて同じ時期に入った人たちも良い人たちで恵まれた環境だなと思いました。しかし、入って初めて知ったことは毎年夏休みに開かれるまなび主催の「日本語指導講座」に参加するまで児童の支援はできないということでした。それを知ったのが入ってすぐのことで、そこから僕はその講座が待ち遠しくて仕方ありませんでした。

待ちに待った講座も終わり、いよいよ支援に行けるようになりました。様々な手続きも終えて、ドキドキとワクワクの中、2007年の11月初めての支援がスタートしました。すぐに冬休みに入ってしまいましたが、2008年も小学校で言う3学期の間も支援は続きます。僕は少しでもその子の学習や生活の支えになればと思っています。

# 「2007年度地域連携センターの取り組みの振り返り」

綿 祐二（地域連携センター長）

地域連携センターBICSは2005年5月に開設し、3年目を終えようとしています。この間、「地域と連携体制を組み、地域資源を活用した新たな人材育成を行い、地域の活性化に貢献する」ことを目標とし、様々な事業を展開してきました。

2007年度も61名の学生実行委員が主体となり1)地域の高齢者と大学生が触れ合える場の提供が行われる「バウムクーヘン」、2)外国人の子どもや学びのゆっくりした子どもたちの学校生活をサポートする「まなびの教室」、3)地域の子どもと大学生との交流を目指す「まるびいの森」、4)障害を持った子どもの支援や精神障害に関するボランティア活動をする「ピース☆」の4事業が展開されました。ここで2007年度の活動を振り返り、新たな発見を以下に記したいと思います。

## その1. 活動を通して、自己成長を確認するPES(Process Evaluation Sheet)の導入

PESとは、各事業における活動による過程評価シートであります。各事業の活動に対して、自己で立てた目標に対しての達成度や自分の気づきを継続的に記録に残し、自己の成長を振り返るものです。これらの記録に対して、各事業の担当教員によるスーパービジョンによって、自己効力感や内在的質的变化を確認していきます。PESの導入によってこれまで活動に追われていた学生たちが、自分自身がおこなっている支援内容をより客観的に捉えることができるようになってきました。たとえば「まなびのゆっくりな子ども」への支援をおこなっている学生が支援を始めた当初「コミュニケーションをなるべく多くとっていく」ことを目標に挙げていました。しかし数か月経たのち、コミュニケーションをとり関係を少しずつ築くことができたので、こちらから声かけをしなくても援助を求めてきてくれるようになった」と記述していました。つまり、自分自身とそれを取り巻く状況を客観的に捉え直すことができるようになってきているのです。こういったことは、ただ支援を継続しているだけではなかなか気づくことができないものです。PESによって「自己成長を確認する」ことで、冷静に自分自身を振り返ることができるのであり、そしてそれを踏まえて、次の課題を設定していくことができるのです。

## その2. 新たなニーズの発見と活動の拡がり

まなびの教室は、日本語を母語としない子どもたちのサポートを主な目的として、教育委員会の依頼によりふじみ野市内の各小中学校へ支援に行っています。しかし、活動を続けているうちに、学校にはさまざまなニーズがあることがわかってきました。自分たちが当初設定した目的と、実際のニーズのどちらにあわせていくのか、昨年度1年間かけてメンバーが悩んできました。ところが、今年度は新メンバーがたくさん増え、いろいろなニーズに対応可能になっただけでなく、メンバー自身にもさまざまな活動希望があることがわかりました。そこで、教育委員会の方と話し合いを重ね、メンバーの希望をいかしながら、学校のニーズにこたえられるように活動の幅を広げました。現在は、日本語を母語としない子どものサポートはもちろん、まなびのゆっくりな子どもへの支援、クラス全体の見守りなど、学校のニーズに合わせたフレキシブルなサポーターとして活動しています。これからは、こうした活動内容にあわせた準備の体制をどう整えていくかが新しい課題です。

## その3. 地域の拠点として

2007年3月にバウムクーヘンのグループが地域の高齢者の方々と「お花見会」を企画し、約150名の地域住民が文京学院大学に集いました。このイベントでは、学生と高齢者が世代を超えた交流が生まれ、多くの方に地域連携センターBICSを知っていただきました。ある参加者から「長年、この近所で暮らしているけれど、初めて文京学院大学の中に入った。いつもは、道路から桜を眺めていただけで、中から見ると本当にすばらしいわね」「ここを桜の名所にしたい」「来年もここで桜が見たい」などの声をいただきました。本来の地域連携とは、大学から発信するだけではなく、大学が地域資源としての役割を担うこと、そして多くの住民の拠点になることの大切さを学びました。地域に根ざすこと、今後も多くの地域住民の方が、気軽に寄れる大学づくりを目指していきたいと思っています。いつの日か「春になったら文京学院大学で会おう」という住民の声が聞こえるくらいに…。

## 「BICSでの思い出及び卒業するにあたって後輩に一言」

### 「BICSに参加していなかったら」

福祉の世界がこんなに広いということを実感できなかった。物事を一から始めることの難さや葛藤、楽しさや達成感を味わうことはできなかった。先輩や後輩、先生方、地域の方々、ボランティア先で出会った人々、世代を超えてこんなに多くの人々と知り合うことはできなかった。

自分の力不足を感じるたびに、前向きに取り組んでいこうとするみなさんの姿勢に何度となく励まされ、「大丈夫だ」「がんばろう」と思うことができました。BICSでの活動を通して学んだことの多くは、一緒に悩んだり迷ったりしたみなさんが教えてくれたことです。

BICSに参加していなかったら、こんなに充実した大学生活にはできなかったらうと心から感じています。これからもBICSを応援しています。

船見 理恵



### 「BICSでの思い出及び卒業するにあたって後輩に一言」

私はBICSの事業の中で「まなびの教室」という日本語を母語としない子への学習支援で活動しました。

実際に小学校で支援ができるようになるまでには、多くの手続きや、日本語指導法講座での学習、これと並行してまなびの教室スタッフの募集などがありました。小学校にて支援を始めてからは、私たちに求められる事が小学校ごとに異なっていたり、授業についていけない子の置かれている現状も改めて認識し、教育現場で対応しきれていない問題を痛感しました。これらの問題点や、支援上での不安などをメンバーで話し合い、子どもたちが日本で生活していく上で、少しでも役に立てるような支援を心がけました。この経験から、自分たちのやり方次第で幅広く意味のある支援ができることを学び、このことは、福祉の世界で働くにあたって、重要な要素であると考えているのでこれからも大切にしていきたいと考えています。

後輩のみなさんも、学業とボランティアを両立するのは決して楽なことではありませんが、相手の気持ちを考えながら仲間同士で支えあい、先生たちにも相談にのってもらいながら取り組むと、とてもよい経験になると思います。頑張ってください。

永坂 梓



### 「baumクーヘン・BICSの皆さんへ」

私は、二年生の春休みに孫の手ボランティアに参加したことからbaumクーヘンに入りました。

baumクーヘンに入った頃から老人ホームでアルバイトし始めたこともあり、定例会や活動にあまり参加できなくなってしまいもともとメンバーが少なかったbaumクーヘンは今の2年生2人が中心となりほとんどの仕事を2人がすることになってしまいましたが、私たち4年には文句一つ言わずにbaumクーヘンの活動を進めてきてくれました。

また、今年度からは、明るくて行動力のある一年生がたくさん入ってくれたので今までもより活動を広げることができました。

さらに、baumクーヘンの活動を通じて地域の方々が私たち大学生に歩みより多大な協力とご指導を下さり、交流を図ることができたことを心から感謝しています。今後は大学側が安心して暮らせる地域づくりのために少しでも役に立てたら良いと思います。

最後に、baumクーヘンの活動を支えて下さった長谷川先生をはじめとするBICSの先生方、橋口さん、四條さん、そしてなによりbaumクーヘンのメンバー、BICSの学生実行委員の皆さん、ボランティアとして参加してくださった学生の皆さんに心からお礼を申し上げます。

貴重な経験をさせていただき本当にありがとうございました。

今林 ちか



## 「あやめ祭福祉ショップについて」

藤原 伸恵(地域連携センター学生副実行委員長)

2007年10月20日、21日に本学であやめ(学園)祭が行われました。私達BICSでは、20日にまるびい福祉ショップをBICSルームで開催しました。まるびい福祉ショップは、地域の方々との交流や地域の方々の活動をまるびい福祉ショップを通して学生や学生以外の方々にも興味をもていただく場所としています。

今年参加していただいた団体は5団体です。福祉用具や手作りお菓子、コーヒー、雑貨、洋服等を販売・展示しました。BICS学生実行委員は、交代制で各団体と交流をしながら宣伝などを行いました。今年は校舎が改装中のため中々BICSルームがある西校舎には訪問者が少なく色々苦戦しました。しかし、地域の方々と学生実行委員の一生懸命な宣伝によって完売する物もあり大盛況に終わることができました。また、地域の方々には学生実行委員の頑張りをとても評価していただきました。

なかなか地域の方々と接する機会がない学生にとって、とても貴重な体験をすることができたと思います。



模擬店販売の様子



学生実行委員も販売に協力

## 「あやめ祭福祉ショップに参加して」

山之内 隆弘(わかばの家)

この度あやめ祭でコーヒー豆とコーヒーの販売をさせていただき誠にありがとうございました。私たち社会福祉法人睦月会わかばの家は東京都国立市にある知的障害者入所更生施設です。男女合わせて45名の利用者がここで生活されています。

今回あやめ祭に初めて参加させていただきました。BICSの学生の皆様の御支援もあり用意した4.5kgのコーヒー豆がお祭りの終了を待たずして完売し驚きました。ひとえに皆様方の御協力の賜物と感謝致し、厚く御礼申し上げます。

今回出品させていただいたコーヒーについて少し御紹介させていただきたいと思います。『おいしいコーヒーが飲みたい』そんな利用者の声に応え『それなら自分達で作ってみようじゃないか』というコンセプトのもと取り組み始めました。コーヒー豆はとても奥の深いもので豆の品質、焙煎、抽出方法により大きく味が変わります。わかばの家のコーヒー班ではフェアトレード機関から有機栽培にて収穫された生豆(きまめ)を仕入れ、その一粒一粒を検品して丁寧にじっくりと焙煎をし、さらに検品を重ねて製品にしています。

おかげさまでお客様からご好評いただき日頃の努力が報われ感極まる次第でありました。

今後ともイベントの際にはお誘い頂けると幸いです。本当にありがとうございました。



わかばの家コーヒー宣伝中



コーヒー販売中

## 「あやめ祭での子どもたちとの交流」

長堀 綾乃(まるびいの森2年)

あやめ祭2日目、まるびいの森の第5回の活動を行いました。8月の活動の折から子どもたちは「いつあやめ祭の準備をするの?」と準備のことを気にする程、あやめ祭を楽しみにしていたようで、当日子どもたちが全員参加して今年度初の欠席者なしという記念すべき活動となりました。

午前中にはダンボールを外枠にマカロニやビーズ、モールなどを飾り付けるといった写真たて作りをし、午後にはクイズを解きながら進むウォークラリーを行いました。写真たて作りでは、高学年の子が率先して材料をみんなで分けていて、お兄さん・お姉さんぶりを見せられ微笑ましく思いました。低学年の子は「見て! 見て!!」と完成した作品をみんなに見せて回るといったように大はしゃぎ。グループごとの写真も撮り、最後には写真たてに入れて持って帰ってもらいました。

また、昨年同様まるびいの森の活動に登録している子どもたちだけでなく、一般の子どもたちにも参加してもらえるようにしました。予想以上に好評で多くの子とも保護者の方にこの写真たて作りに参加してもらうことができ、まるびいの森の活動を広く知ってもらえたのではないかと思います。

ウォークラリーでは子どもたちが普段の活動では関わらない学生や先生と話したりすることで、緊張しながらもとても楽しんでいるようでした。学生も積極的に子どもたちに話しかけていて交流が持たたのではないかと思います。食事を買う場面でもあれも食べたいこれも食べたいとお祭りという雰囲気が子どもたちにとってとても良いものだったと感じました。来年度もまたさらに子どもと学生とが深く関わるような活動にできたらと思います。



まるびい森の活動風景



クラフト制作中

## 「あやめ祭～あそびの伝承～」

岩間 美穂(バウムクーヘンリーダー)

2007年10月21日(日)あやめ祭2日目、バウムクーヘンでは「あそびの伝承」を行いました。けんだま・べーごま・こま・めんこ・おてだま・おはじき・あやとり・わなげ・マグダーツの9種類のむかし懐かしい遊びを今に伝える企画でした。バウムクーヘンの高齢者サロンに以前から関わりのある地域の老人会の方々に遊びの先生になっていただき、昔の遊びに触れる機会をつくりました。あやめ祭当日ということもあり、学生だけではなく小さい子どもから親御さん、高齢者の方など幅広い世代の方々が足を運んでくださり、とても賑やかなイベントとなりました。元気に騒ぐ子どもたちや誰よりもべーごまに夢中になっている親御さん、地域の方と学生でマグダーツの対戦をしたりと笑顔が耐えないイベントは時間があっというまに過ぎていきました。世代間交流はもちろん、様々な人との出会いをととても嬉しく感じることができました。

いつもはバウムクーヘンのイベントに地域の方が参加する形になっていますが、今回は地域の方に先生になっていただき昔の遊びを教えてもらうという、いつもとは違った形で企画し、貴重な経験ができたと思います。地域の方から学ぶ事はとても多いのだと改めて実感しました。地域の方も、今の世代に伝えたいことをたくさん持っていると思います。これからは地域の方から学ぶ機会を増やして、学生がそれを受け継ぎ、地域にもっと出て行けるようになりたいです。



けん玉に挑戦



あそびの伝承で実施した昔の遊び

## 「東上沿線学童保育の集い～シンポジウムで感じた成長」

富士原 優子(まるびいの森副リーダー)

2007年12月2日に開催された、第25回東上沿線学童保育のつどいに分科会シンポジストとして参加させていただきました。前に出てまるびいの森の活動発表だけでなく、質問をいつされるか分からないという事に、今までにない緊張をしたのを覚えています。

シンポジストとして参加されていた方々のお話を聞いて、児童館や学童の仕組みが詳しく分かり現在どのような問題を抱えているのか分かっただけでなく、各場所でどのように子ども達と遊んでいるか、どのように地域との交流を図っているのかなど大変勉強になりました。私たちも色々な方からの意見を聞いたり取り入れて、毎回のまるびいの森の企画を立てているのですが、今まで思いつかなかった行事やイベントがあり大変勉強になりました。質問を司会の方から受けたのですが、緊張で頭が真っ白になってしまいちゃんと答えられていたかあまり覚えていないのが残念です。

また、私達の発表の時にスライドを使っでの発表と、毎回の活動で歌っているまるびいの森のテーマソングなどを歌ったのですが、1年前の時からはこのような人前で発表するなんて考えられない事だったので、自分達が今までにやってきた活動がどんどんと大きく成長しているのだと身をもって感じました。これも私達だけの力ではなく、先生や地域の方々のお力添えあつての事だと思います。

今回学んだ事を今後どんどん取り入れて、より良いまるびいの森に成長していきたいと思います。



シンポジウムの様子



まるびいの森の歌発表

### ■編集後記■

BICSが、開所してもうすぐで4年目になります。どの事業も地域と関わりを持って活動してきているようで、それによって得るものが多く、各事業が少しずつ成長してきているようです。今後さらに地域との関わりを増やし、地域と各事業がもっと連携していけるように、また事業同士も発展していけるように頑張っていこうと考えております。

(広報 穂積)

発行日 2008年3月5日

発行 文京学院大学地域連携センター  
〒356-8533

埼玉県ふじみ野市亀久保1196

TEL: 049-261-7944 / FAX: 049-269-6817

E-mail: info\_bics@liberty.u-bunkyo.ac.jp